TOPICS 1

トピックス…①

屑米の需要拡大と国際米市場への影響

わが国では、米（コメ）不足が話題となった2024年夏以降、その原因について様々な主張や議論が展開され、一部のメディアでは想定していなかった米価高騰の「犯人探し」まで始まった。しかし、世界の米市場に目を向けると、より深刻な問題が進展しつつある。米国農務省経済調査サービスの報告によると、近年における米消費の多様化は、食料の安全保障、家畜飼料や工業用原料の需給に大きな影響を及ぼす可能性がある。

１．米市場の特徴

米は、世界で最も広く栽培され、かつ最も多く消費されている穀物の１つである。しかし、米は、特にアジアにおける主食として重要であるため、国際市場での取引量が少なく、最も貿易が制限された穀物の１つでもある。米の価格変動と輸出禁止策は、2006年から2007年にかけての世界的な食料危機と2020年のコロナウイルス（COVID-19）パンデミック発生の際に深刻な懸念材料であった。また、2022年以降、インドが屑米（砕米など）の輸出を禁止したことは、国際米市場に影響を与えたもう一つの顕著な出来事であった。

世界各国の米市場は、特別な香りのある品種、一般的な長粒から短粒の品種、白米、玄米、炊飯米、屑米まで、多様な製品で構成されている。伝統的にアジアを中心に主食とされてきた米は、今やあらゆる所得層の家庭だけでなく、各大陸の食品工場や飼料工場などでも消費されている。消費の多様化により、複数の差別化された米製品市場が形成され、それぞれに独自の価格と需給の傾向がみられる。同時に、これらの各市場は相互に関連しており、それぞれが全体的な需給状況に連動している。東アジアの中・高所得国の食生活における米の役割は減少しつつあるが、世界中の多くの低所得国は依然として米を主食としており、これらの国々の食料安全保障は米に依存しているといっても過言ではない。また、米市場に関わる産業の経営基盤は、供給の混乱や価格の変動に対して脆弱な状況にある。

２．屑米市場の変化

米国農務省経済調査サービスによる調査（Growing Demand for Broken Rice for Feed and Food、2025年４月30日公表）は、屑米市場の牽引者である中国に焦点を当て、世界米市場における新たな動向を明らかにした。その中で、屑米の需給構造がどのように変化してきたかに着目し、主要な輸入国における具体的な用途と将来の需要拡大の可能性、および長期的な世界米市場への影響が分析された。

屑米は精米過程で発生する副産物であり、世界のほとんどの地域で他の米製品よりも低価格で取引されている。その用途は、家畜飼料、ペットフード、加工食品、さまざまな工業原料、および高品質米とのブレンド用などである。

一方、屑米は世界中の貧しい消費者にとって安価なカロリー源でもある。西アフリカのセネガルでは、屑米は人気のある郷土料理の主要材料であり、その需要は国民所得の増加と都市化とともに増加する可能性がある。アフリカの屑米輸入量は、2018年から21年にかけて340万トンから380万トンの間で変動していたが、2022年には410万トンに増加した。アフリカの屑米輸入国21カ国のうち、セネガル、ブルキナファソ、ギニア、コートジボワール、ガーナ、トーゴ、ベナンなどの西アフリカ諸国の輸入量が特に多い。

また、中国農業農村部によると、都市部においては比較的裕福な消費者の食事が多様化し、動物や魚のタンパク質、野菜、果物、加工食品、レストランでの食事が増えるにつれて、伝統的な主食である米の消費は停滞している。このような中、2022年には、中国が屑米の主要な輸入国として浮上し、輸入量は2019年の100万トン未満から350万トンへと３倍以上に増加した。2020年から22年にかけて中国で急増した屑米輸入は、ロシアとウクライナの戦争による穀物供給チェーンの混乱の下、主に家畜飼料穀物の代替品として使用された。屑米は、トウモロコシと比べオレイン酸が多く、カロチンが少ないなどの特性がある一方、家畜にとってトウモロコシとほぼ同等の栄養価（TDN）を有している。中国の飼料産業による屑米輸入の急増は、西アフリカ諸国の低所得者層の消費と競合関係にある。

３．今後の展望

米の需要構造は、2000年代半ば以降、家畜飼料やその他の工業製品（食品加工や蒸留アルコールなど）のために屑米の貿易が拡大してから変わった。この変化は、各国政府が過剰作付けを奨励する政策を実施した結果の一部であり、それにより米の在庫が過度に膨らみ、政府が家畜飼料用に時々放出することになった。さらに、多様な用途での米の利用可能性は、アジア諸国での所得の増加と食事の多様化にともなう食用消費の減少よって拡大した。

中国は、米の大消費国として世界の米貿易の流れを変える可能性を有している。中国がなりふり構わない「競争者」へと変身した時代、同国の屑米輸入量は価格と反比例の関係にあり、屑米の消費量はトウモロコシの価格動向に左右されている。一方、アフリカ諸国の輸入量は、人口増加と都市化に牽引されており、これらの国々における主食としての屑米の需要は価格に非弾力的であり、中国のそれに比べて価格の変化に左右されにくい。

屑米の世界的な取引は、主に家畜飼料市場、食料品市場、工業用原料市場であることに変わりがない。しかし、米取引に占める屑米シェアの増加は、注意深く観察すべき特徴がある。特に重要なことは、西アフリカとアジアでの所得が増加し続ける場合、世界の屑米市場において食用と家畜飼料との間での競合が増大する可能性があるかどうかである。FAOの予測によると、アフリカ大陸の人口は2050年に世界人口の４分の１を占める24億人になるが、これによって屑米の取引や地政学的な需給バランスが大きく変化する可能性があるという。さらに懸念されるのは、屑米需要の増加が、バイオエネルギー生産のためのトウモロコシの代替需要で発生したように、用途の変化が食料安全保障に影響する可能性があるかどうかである。